

## 政務調査費調査等報告書

1、事業名 視察研修

2、事業内容 H23、2月、14、15日

南幌町、地域公共交通活性化事業及び、町内巡回バスの運行状況について、移住体験事業について、喜茂別町、地域おこし協力隊について、

3、成果

南幌町、

① 地域公共交通活性化事業及び、町内巡回バスの運行状況について

<これまでの経緯>

平成12年から町民バス運行検討会議で民間バスとの路線は避けた形で13年に1年間試験運行。利用者が予想を上回る実績のため14年度から本格実施。

料金は、100円でスタート。H16年に大人150円、H22年から200円

運行状況、H14年は、年間293日運行。(夕鉄バスに委託) H17年度に利用者減から205日。H22年から年100日

利用状況、H14年5049人で、2年ごと500人くらいずつ減っている。

H21年で3329人。それに伴い町負担額も、運行当初は、570万であったが、現在は本数を減らしたため、360万に減少。

H22年に利用減を加味し、公共交通の見直しを図るべく、南幌町地域公共交通活性化協議会を立ち上げ公共交通の活性化を新たに模索した。国土交通省の、地域公共交通調査事業を利用し、利用状況のアンケート、コミュニティバスの接続改善、運行形態の見直し、デマンド型交通の導入を模索。H23年度から、新たな運行を行なう予定。

<まとめ>

当町も、福島町地域公共交通活性化協議会を立ち上げたばかりである。2年後には南幌を見習うような形で地域バスが運行されると思う。利用者の減少が一番の課題なので、ただ走らせるのではなく、ニーズに合った運行を考えなければならない。

② 移住体験事業

目的、田舎暮らしを体験してみたい。北海道に移住してみたいという願いをお手伝いする事業である。

移住定見住宅は、築30年の、元の教員住宅で家賃は12000円、2戸。電話、ネットで申請。

H19年4組、168日。H20年13組308日、H21年14組338日、H22年10組、361日。本州からの体験が多い。

利用者は、定年したご夫婦が多い。夏期に集中しており、冬はほとんど利用がない。

リピーターも多い。これまでに1組が移住を済ませ、家を建てている。

夏を涼しい北海道で過ごしたいという中期での移住体験が多いようだ。

喜茂別町

① 地域おこし協力隊

総務省の事業で、地域おこし協力隊とは、人口減少や高齢化が著しい地方で、都市部の人材を地域おこし協力隊として積極的に誘致し、定住や地域の維持強化しようとするもの。

<喜茂別の協力隊の特徴>

10名の協力隊を1度に採用。2年の活動後、定住意欲を持つ人に支援  
集落支援を目的とし実際に受け持つ集落に移住。集落支援委員が協力隊のサポートを行い、  
地域の人との橋渡し。1週間に1度協力隊があつまり、ミーティングを行い、今週は何を  
手伝うのか支援員から、シフト票をもらいそれに基づいて、雪下ろし、農作業、町のイベ  
ントなどの手伝いに行く。

<これまでの流れ>

22年度から実施し、1次募集で200人、選考をへて、20人まで絞込みグループワ  
ーク試験をへて採用。現在1年目の最後、

住宅は無料で月16万5千円、年金、保険は別。全員町外出身者、  
町に残るために就業に向けたビジョンは、飲食店経営、自然学校運営、画家、整体院、特  
産品販売、町内就職など。23年度で方向性を見極め、必要があれば役場も協力する。  
議会では、事前に委員会もなく予算委員会で集中審議。議会は寝耳に水。ただ、何もしな  
いで地域が衰退していくよりは、

報道が先行していて、町内では若者が何をしているのかわからない人も多い。年よりは気  
丈に生きている。行政の無駄な施しはいらない。

試行錯誤と、就業のビジョンが描けず、協力隊の方向性が見えてこないのも現実。

23年度で契約は切れるが、場合によっては1年延長もありえる。

福島は、24年度から、観光推進の地域おこし協力隊を採用するが、果たして定住という  
ところに結びつくかは、疑問。町外の視点で町の活性化につながるか。